

# なるほど！ワークショップ講座

擬似フィールド・ワークの世界へようこそ♪

## “幕末～明治の衣・食・住・女性”

みなさんは、タイムマシンに乗って、幕末～明治初期の日本に来ています。ちょうどこの時代に初めて日本を訪れた欧米人から、フィールド・ワークの報告書を見せてもらいました。外交官、学者、旅行家、実業家…さまざまな視点から一体どんな内容が出てくるのでしょうか。



# < フローチャート >

## 1. 導入

## 2. 擬似フィールドワーク

### PART I：衣食住

- ①調査報告書を読む
- ②グループ・ディスカッション
- ③各グループからの発表
- ④解説

### PART II：精神面

- ①調査報告書を読む
- ②グループ・ディスカッション
- ③各グループからの発表
- ④解説

### PART III：女性

- ①調査報告書を読む
- ②グループ・ディスカッション
- ③各グループからの発表
- ④解説

## 3. 質疑応答

## 4. まとめ



石川 恵悟

歴史考察においては、古代史から近現代史まで通史的に分析することを心がけています。教育やメディアによるミスリードを残念に思い、fact finding (=事実の探求) を大切にしています。

## < P A R T I >

リュードルフ（ドイツ商人、1855年）

郊外の豊穡さはあらゆる描写を超越している。山の上まで美事な稲田があり、海の際までことごとく耕作されている。恐らく日本は天恵を受けた国、地上のパラダイスであろう。人間がほしいというものが何でも、この幸せな国に集まっている。

ラザフォード・オールコック（英国の初代駐日公使、1859～1862年）

これらのよく耕作された谷間を横切って、非常なゆたかさのなかで所帯を営んでいる幸福で満ち足りた暮らし向きのよさそうな住民を見ていると、これが圧政に苦しみ、苛酷な税金をとり立てられて窮乏している土地だとはとても信じがたい。むしろ反対に、ヨーロッパにはこんなに幸福で暮らし向きのよい農民はいないし、またこれほど温和で贈り物の豊富な風土はどこにもないという印象を抱かざるをえなかった。

タウンゼント・ハリス（米国の初代駐日公使、1856～1862年）

彼らは皆よく肥え、身なりもよく、幸福そうである。一見したところ、富者も貧者もない。—これが恐らく人民の本当の幸福の姿というものだろう。私は時として、日本を開国して外国の影響を受けさせることが、果してこの人々の普遍的な幸福を増進する所以であるかどうか、疑わしくなる。私は質素と正直の黄金時代を、いずれの他の国におけるよりも多く日本において見出す。

スミス主教（イギリス国教会の神学者、1860年）

東洋の主な生活必需品のふたつである米と魚が低廉であるために、日本の下層の人々はすくない稼ぎでやってゆけるし、またそのために、中国の同様な労働階級と比べて、物質的安楽を享受している人が多い。

アルジャーノン・B・ミットフォード（英国外交官、貴族、1866～1870年）

私は日本の農家の家屋敷ほど絵のように美しく、居心地よさそうな住まいは世界のどこの国にも見られないのではないかと思っている。～彼ら幸せな農民の表情には、ありありと快活さが浮かんでいた。彼らの粗末な家と同様に、その稼ぎもわずかであったが、それで十分で、何の不平もなかった。男も女も笑みを湛え、道行く外国人を親しげに歓迎してくれた。

ハインリッヒ・シュリーマン（ドイツ考古学者、トロイア遺跡発掘、ミケーネ文明発見、1865年）

もしヨーロッパの親たちが日本の習慣を取り入れて、子供たちの結婚準備から解放されたら、それはなんとという励ましになることだろう。三分で買えるほどの、取り片付けられる携帯用の調理具、漆塗りの椀がいくつか、茶道具に木枕二箇、何枚かの衣類と竹製の敷物が八枚 — これが、日本の新婚夫婦が四平方メートル二部屋からなる新居をかまえるのに必要なもののすべてである。

エリザ・R・シドモア（米国の女性ジャーナリスト・紀行作家、ワシントンのポトマック河畔への日本の桜の移植を大統領に提案し実現させる、1884年よりたびたび来日）

日本の貧しい家庭は窮乏状態ですが、世界のどこの文明人よりも慎ましい財産から、多くの娯楽を引き出し享受しております。

木綿着をほとんどオール・シーズン着込み、冬の寒風が剥き出しの手足を刺し、厚みのない着物を突き通します。さらに夏の猛暑が身を責めますが、彼らは禁欲のおおらかさで過酷な環境に堪え、素晴らしい春と秋を快適に謳歌します。

藁葺き屋根、畳、わずかな綿詰め布団のそれぞれが、労働者階級の雨宿り、敷物備品、寝床として使われ、食事の献立は米、栗、魚、海藻で構成されます。貧しい農民は田畑に育つ年三回の収穫を目当てに、四〇フィート〔一二メートル〕角の小さな土地を耕して家族を養い、また漁民も日本近海を遊泳する三六〇種の食用魚介のおかげで飢え死の心配はありません。

しかも、生活や環境に関する徹底した衛生観念は、裕福な家庭と同様、貧しい家庭の習性となっています。

バジル・ホール・チェンバレン（英国の日本学者、日本の事物誌や旅行案内を書く、東京帝国大学の言語学教授、1873～1911年）

下層階級の人でも、身体はいつも洗って、ごしごしこするから、彼らの着物は、外部は埃で汚れていようとも、内部がたいそう汚いということは、とても想像できないのである。日本の大衆は世界で最も清潔である。日本人が風呂に入る習慣の魅力は、この国に居住する外国人のほとんどすべてがそれを採用しているという事実によって証明される。

## < P A R T II >

ラフカディオ・ハーン＝小泉八雲（ギリシャ生まれの英国人作家、米国に渡り、1890年に来日し帰化、東京大学や早稲田大学で文学を教える）

それにしても、この人々のお互い同士の善意を、どう説明すればよいのだろう。荒っぽさも、暴力も、不正直もなく、法を犯すものもなく、そのうえ、このような社会状態が、何世紀もの間、同じように存続してきたとわかったら、ずいぶん道徳的に優れた人間の世界に入り込んだと思いたくなるだろう。すべて、こうしたもの柔らかな礼儀正しさ、申し分のない正直さ、純粹素朴な親切を、あなたは、心の底からの善良さからくるものと解釈するだろう。

エドワード・シルヴェスター・モース（米国の動物学者、ダーウィンの進化論を日本に紹介、1877～1880、1882年）

人々が正直である国にいることは実に気持ちが良い。私は決して財布や懐中時計の見張りをしようとしな。錠をかけぬ部屋のテーブルの上に、私は小銭を置いたままにするのだが、日本人の子どもや召使いは一日に数十回出入りしても、触ってはならないものには決して手を触れぬ。

私はもう学生たちに惚れ込んでしまった。これほど熱心に勉強しようとする、よい少年たちを教えるのは、じつに愉快だ。授業に対する身の入れ方、礼儀正しさ、教師に対する尊敬の念に満ちた態度ふるまいは、まったく感動的である。……これらの若者は、サムライの息子たちで、大いに裕福な者もいれば、貧乏な者もいるが、みな、お互いに慎み深く丁寧であり、また非常に静かで注意深い。

イザベラ・バード（英国の女性世界旅行家、1878、1894～1895年）

ヨーロッパの多くの国々や、わがイギリスでも地方によっては、外国の服装をした女性の一人旅は、実際の危害を受けるまではゆかなくとも、無礼や侮辱の仕打ちにあったり、お金をゆすりとられるのであるが、ここでは私は、一度も失礼な目にあつたこともなければ、真に過大な料金をとられた例もない。

ほんの昨日のことであつたが、革帯が一つ紛失していた。もう暗くなっていたが、その馬子はそれを探しに一里も戻つた。彼にその骨折り賃として何銭かをあげようとしたが、彼は、旅の終わりまで無事届けるのが当然の責任だ、と言って、どうしてもお金を受けとらなかつた。

マシュー・カルブレイス・ペリー（米国海軍軍人、東インド艦隊司令長官、日米和親条約を締結、1854年）

日本人は、驚くほど異常な好奇心を示しており、わが国の才能ある人々の手による多くの発明品を展示した際には、その好奇心を満足させるために、あらゆる手段を用いた。

ラザフォード・オールコック（英国の初代駐日公使、1859～1862年）

日本人は中国人のような愚かなうぬぼれはあまりもっていないから、もちろん外国製品の模倣をしたり、それからヒントをえたりすることだろう。中国人はそのうぬぼれのゆえに、外国製品の優秀さを無視したり、否定したりしようとする。逆に日本人は、どういう点で外国製品がすぐれているか、どうすれば自分たちもりっぱな品をつくり出すことができるか、ということを見いだすのに熱心であるし、また素早い。

アリス・メイベル・ベーコン（米国の教育者、津田梅子の開いた女子英学塾（後の津田塾大学）の運営に協力、1888、1899年）

アメリカ人ならベッド、テーブル、椅子の購入にあてるであろう資金を、日本人は掛け物、花、花瓶などの、なにやら品の良い、すてきなものを手に入れるのに使ってしまう。日本の労働者の賃金は、欧米の労働者が飢えてしまいそうなくらい安いのに、彼らには美の感性を磨く時間と余裕があるのだ。

日本人にとって、「人生は食べるだけではない」のだ。人生は美しくもなければならぬ。この美を大切に作る心が、日本人を上品で洗練された存在にする。

エミール・ギメ（フランスの実業家、ギメ東洋美術館の創設者、1876年）

日本がヨーロッパの思想に関心を寄せるようになったとき、先駆的役割を果たした日本人は、私の考えでは、うわべだけを見て劣等感に陥いるという誤りを犯したのだ。確かに彼らは、まだ蒸気を使用した工場も理工科学校も持っていなかった。しかし何とすばらしいものを彼らは持っていたのか。それらを理由なく放棄しているのだ。日本は日本の風習をあまり信用していない。日本はあまりにも急いで、その力と幸を生み出してきたいろいろな風俗、習慣、制度、思想さえも一掃しようとしている。日本は恐らく自分たちを見なおすときがくるだろう。私は日本のためにそう願っている。

### < P A R T III >

バジル・ホール・チェンバレン（英国の日本学者、日本の事物誌や旅行案内を書く、東京帝国大学の言語学教授、1873～1911年）

日本の婦人はきわめて女性的である — 親切で、優しく、誠実で、愛らしい。しかし、彼女たちが今まで男性によって取り扱われてきた状態は、寛容な心をもつヨーロッパ人ならば誰でも苦痛を感じざるほどのものであった。だから、ついに彼女たちの中のある人々が、自分たちを解放しようと努力しつつあるのも不思議ではない。女性の運命は、いわゆる「三従」という言葉に要約される。すなわち、結婚前は父に従い、結婚後は夫とその両親に従い、未亡人となったら息子に従う。現在においても、この国でもっとも高貴な婦人でも、夫のために単調な仕事をやり、夫のために物をもってきたり運んだり、旦那様が外出するときは玄関で恭々しく頭を下げ、食事では夫に給仕しなければならない。

日本の女性は、その不利な地位のゆえに、あるいは、それにもかかわらず、魅力的であるという事実は、何にもまして外国の女性の旅行者たちの賞讃の言葉が決定的に証明している。というのは、女性がこのように賞讃した場合には、なにか下心があつてのこととは考えられないからである。ヨーロッパの女性たちが日本女性の素晴らしさに夢中になり、どうして彼女たちがあんな男たちと同じ日本人なのか、と驚き怪しんだという話を、わたしは何度聞かされたことであろうか。

ラフカディオ・ハーン＝小泉八雲（ギリシャ生まれの英国人作家、米国に渡り、1890年に来日し帰化、東京大学や早稲田大学で文学を教える）

（チェンバレンに宛てた手紙 ※二人は頻繁に文通していた）

しかし、日本女性は何という優しさでしょう！ — 善性に対する日本民族の持てるあらゆる可能性は、女性に凝集しているように思われます。これは、西洋の啓蒙思想に対するわれわれの信仰を揺るがすものです。もしこの優しさが、抑圧と圧政の結果であるとするならば、抑圧も圧政も全面的に悪いとは言えません。これに対し、アメリカ女性は、自分自身が偶像崇拜の対象となりながら、その性格をどんなにダイヤモンドよろしく硬直させていることでしょうか。この世の永遠の秩序において、いずれが至高の存在でありましょうか？ — 子どもっぽくて、人を信じやすく、気立ての優しい日本女性でありましょうか — それともわれわれの、より人為的な社会に住んでいる、華やかで、計算ずくめの、人の心を見抜く西洋の魔女、悪に対する能力は巨大で、善をなす才能には乏しい魔女でありましょうか。

アリス・メイベル・ベーコン（米国の教育者、津田梅子の開いた女子英学塾（後の津田塾大学）の運営に協力、1888、1899年）

日本の農民のあいだに、最も自由で独立心に富んだ女性を見出すことには何の疑いもない。

彼女らの生活は、上流階級の婦人のそれより充実しており幸せだ。何となれば、彼女ら自身が生活の糧の稼ぎ手であり、家族の収入の重要な部分をもたらしていて、彼女の言い分は通るし、敬意も払われるからだ。

ジョルジュ・イレエル・ブスケ（フランスの法律家、日本政府顧問、1872～1876年）

農家の主婦は夫と労働を共にするだけでなく、その相談相手にもなる、主婦が一家の財布を預かり、実際に家庭を支配することが多い。

ハーバート・G・ポンティング（英国の写真家、1902～1906年）

彼女は独裁者だが、大変利口な独裁者である、彼女は自分が実際に支配しているように見えないところまで支配しているが、それを極めて巧妙に行っている、夫は自分が手綱を握っていると思っている。そして、可愛い妻が実際にはしっかり方向を定めていて、彼女が導くままに従っているだけなのを知らないのだ。

日本の女性は賢く、強く、自立心があり、しかも優しく、憐れみ深く、親切で、言い換えれば、寛容と優しさと慈悲心を備えた救いの女神そのものである。

メアリー・フレイザー（英国の駐日公使夫人、1889～1891年）

もし我々西洋の女性が東洋の姉妹たちから、勇気ある謙遜、義務への忠実、比類なき無私を学ぶなら、どんなにか世のなかを変えることができるだろう。

ゴードン・スミス（英国の博物学者、1898～1915年（途中何度か帰国））

（日本到着後六日目にして）

この国ではひとりとして恰好い男を見かけない。ところが女のほうはまるで反対だから驚いてしまう。





17. 鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』（講談社学術文庫）2000
18. キャサリン・サツム『東京に暮す』（岩波文庫）1994
19. 小泉八雲『明治日本の面影』（講談社学術文庫）1990
20. 黄文雄『日本人はなぜ世界から尊敬され続けるのか』（徳間書店）2011
21. ゴ・ロウニン『日本俘虜実記』上下（講談社学術文庫）1984
22. 佐伯修『外国人が見た日本の一世紀』（洋泉社新書）2003
23. 佐伯彰一・芳賀徹『外国人による日本人論の名著』（中公新書）1987
24. 佐藤貴彦『日本人はこんなに素晴らしかった』（パレードブックス）2008
25. スーザン・B・ハンレー『江戸時代の遺産』（中央公論社）1990
26. 竹内誠監修『江戸庶民の衣食住』（学習研究社）2003
27. 中江克己『お江戸の意外な生活事情』（PHP文庫）2001
28. ニコライ『ニコライの見た幕末日本』（講談社学術文庫）1979
29. ハーバート・G・ポントینگ『英国人写真家の見た明治日本』（講談社学術文庫）2005
30. ハインリッヒ・シュリーマン『シュリーマン旅行記 清国・日本』（講談社学術文庫）1998
31. V・F・アルミニヨン『イタリア使節の幕末見聞記』（講談社学術文庫）2000
32. フリーダ・フィッシャー『明治日本美術紀行』（講談社学術文庫）2002
33. ペルリ提督『日本遠征記（一）』（岩波文庫）1948
34. 丸田勲『江戸の卵は1個400円！』（光文社新書）2011
35. 村岡正明『日本絶賛語録』（小学館）2007
36. マーチニコフ『回想の明治維新』（岩波文庫）1987
37. 柳田國男『明治大正史』上下（講談社学術文庫）1976
38. ラザフォード・オールコック『大君の都』（岩波文庫）1962
39. リースマン夫妻『日本日記』（みすず書房）1969
40. ルイス・フロイス『ヨーロッパ文化と日本文化』（岩波文庫）1991
41. ロバート・フォーチュン『幕末日本探訪記』（講談社学術文庫）1997
42. 渡辺京二『逝きし世の面影』（平凡社）2005
43. W・モリス『日本精神』（講談社学術文庫）1992
44. 『世界が見た 懐かしい日本の風景』（日経ナショナル ジオグラフィック社）2007
45. 『世界が見た ひたむきな日本人』（日経ナショナル ジオグラフィック社）2007
46. 双葉社スーパームック『過ぎし江戸の面影』（双葉社）2011
47. 双葉社スーパームック『江戸 明治 遠き日の面影』（双葉社）2011